

夢
十
夜

夏
目
漱
石

文
青
庫
空

第一夜

.....

7

第二夜

.....

13

第三夜

.....

19

第四夜

.....

25

第五夜

.....

31

第六夜

.....

37

第七夜

.....

43

第八夜

.....

49

第九夜

.....

55

第十夜

.....

61

第一夜

本文は普空文庫より引用

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐っていると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然云った。自分も確にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぼつちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじやなかるうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眼そうに睜たまま、やつぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙つて、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思つた。

しばらくして、女がまたこう云つた。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待つて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。
「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待つていられますか」

自分は黙つて首肯した。女は静かな調子を一段張り上げて、
「百年待つていて下さい」と思い切つた声で云つた。

「百年、私の墓の傍に坐つて待つていて下さい。きつと逢いに来ますから」
自分はただ待つていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘つた。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿つた土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちていた間に、角が取れて滑かになつたんだらうと思つた。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分は昔の上に坐つた。これから百年の間こうして待つてゐるんだなと考へながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それがまた女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅の天道がのそりと上つて来た。そうして黙つて沈んでしまつた。二つとまた勘定した。

自分はこう云う風の一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日か頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、昔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつてちようど自分の胸のあたりまで来て留まつた。と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薔が、ふつくと舟を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂つた。そこへ遙の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を

前へ出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思はず、遠い空を見たら、暁の星がたつた一つ瞬いていた。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

第二夜

こんな夢を見た。

和尚の室を退がって、廊下伝いに自分の部屋へ帰ると行灯がぼんやり点っている。片膝を座蒲団の上に突いて、灯心を掻き立てたとき、花のような丁子がぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱっと明かるくなった。

襖の画は蕪村の筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近とかいて、寒むような漁夫が笠を傾けて土手の上を通る。床には海中文殊の軸が懸っている。焚き残した線香が暗い方でいまだに臭っている。広い寺だから森閑として、人氣がない。黒い天井に差す丸行灯の丸い影が、仰向く途端に生きてるように見えた。

立膝をしたまま、左の手で座蒲団を捲って、右を差し込んで見ると、思った所に、ちゃんとあった。あれは安心だから、蒲団をもとのごとく直して、その上にとっかかり坐った。

お前は侍である。侍なら悟れぬはずはなからうと和尚が云った。そういつまでも悟れぬところをもつて見ると、御前は侍ではあるまいと言った。人間の屑じやと言った。ははあ怒ったなと云つて笑つた。口惜しければ悟つた証拠を持って来いと云つてぶいと向をむいた。怪しからん。

隣の広間の床に据えてある置時計が次の刻を打つまでには、きつと悟つて見せる。悟つた上で、今夜また入室する。そうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命

が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きている訳には行かない。綺麗に死んでしまう。

こう考えた時、自分の手はまた思わず布団の下へ這入った。そうして朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐつと束を握って、赤い鞘を向へ払つたら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光つた。凄じいのが手元から、すうすうと逃げて行くように思われる。そうして、ことごとく切先へ集まって、殺気を一点に籠めてる。自分はこの鋭い刃が、無念にも針の頭のように縮められて、九寸五分の先へ来てやむをえず尖つてるのを見て、たちまちぐさりとやりたくなくなった。身体から右の手首の方へ流れて来て、握っている束がにちやにちやする。唇が顫えた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけておいて、それから全伽を組んだ。——趙州曰く無と。無とは何だ。糞坊主めとはかみをした。

奥歯を強く噛み締めたので、鼻から熱い息が荒く出る。こめかみが釣つて痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやった。

懸物が見える。行灯が見える。畳が見える。和尚の薬缶頭がありありと見える。鰐口を開いて嘲笑つた声まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬缶を首にしなくてはならぬ。悟つてやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云うのにやっぱり線香の香がした。何だ線香のくせに。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云うほど擲つた。そうして奥歯をぎりぎりとなんだ。両腋から汗が出る。背中が棒のようになった。膝の接目が急に痛くなつた。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。けれども痛い。苦しい。無はなかなか出て来ない。出て来ると思ふとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜しくなる。涙がほろほろ出る。ひと思に身を巨巖の上につけて、骨も肉もめちやめちやに砕いてしまいたくなる。

それでも我慢してじつと坐っていた。堪えがたいほど切ないものを胸に盛れて忍んでいた。その切ないものが身体中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようと焦るけれども、どこも一面に塞がって、まるで出口がないような残刻極まる状態であつた。

そのうちに頭が変になつた。行灯も蕪村の画も、畳も、違棚も有つて無いような、無くつて有るように見えた。と云つて無はちつとも現前しない。ただ好加減に坐つていたようである。ところへ忽然隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はつと思つた。右の手をすぐ短刀にかけた。時計が二つ目をチーンと打つた。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つてる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰れて、青坊主になっている。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさ

と答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等だ。

左右は青田である。路は細い。鷲の影が時々闇に差す。

「田圃へかかったね」と背中で云った。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向けるようにして聞いたたら、

「だって鷲が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷲がはたして二声ほど鳴いた。自分は我子ながら少し怖くなった。こんなものを背負つていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、背中で、

「ふふん」と云う声をした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。ただ

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙つて森を目標にあるいて行つた。田の中の路が不規則にうねつてなかなか思うように出られない。しばらくすると二股になった。自分は股の根に立つて、ちよつと休んだ。

「石が立つてるはずだがな」と小僧が云った。

なるほど八寸角の石が腰ほどの高さに立っている。表には左り日ヶ窪、右堀田原とある。闇だのに赤い字が明かに見えた。赤い字は井守の腹のような色であった。

「左が好いだろう」と小僧が命令した。左を見るとさっきの森が闇の影を、高い空から自分らの頭の上へ抛げかけていた。自分はちよつと躊躇した。

「遠慮しないでもいい」と小僧がまた云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目のくせに何でも知つてるなと考えながら一筋道を森へ近づいてくると、背中で、「どうも盲目は不自由でいけないね」と云った。

「だから負つてやるからいいじゃないか」

「負ぶつて貰つてすまないが、どうも人に馬鹿にされていけない。親にまで馬鹿にされるからいけない」

何だか厭になった。早く森へ行つて捨ててしまおうと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。——ちようどこんな晩だったな」と背中で独言のように云っている。「何が」と際どい声を出して聞いた。

「何がって、知ってるじゃないか」と子供は嘲けるように答えた。すると何だか知ってるような気がし出した。けれども判然とは分らない。ただこんな晩であつたように思える。そうしてもう少し行けば分るように思える。分つては大変だから、分らないうちに早く捨ててしまつて、安心しなくつてはならないように思える。自分はますます足を早めた。

雨はさつきから降っている。路はだんだん暗くなる。ほとんど夢中である。ただ背中に小さい小僧がくっついていて、その小僧が自分の過去、現在、未来をことごとく照して、寸分の事実は洩らさない鏡のように光っている。しかもそれが自分の子である。そうして盲目である。自分はたまらなくなつた。

「ここだ、ここだ。ちようどその杉の根の処だ」

雨の中で小僧の声は判然聞えた。自分は覚えず留つた。いつしか森の中へ這入つていた。一間ばかり先にある黒いものはたしかに小僧の云う通り杉の木と見えた。

「御父さん、その杉の根の処だったね」

「うん、そうだ」と思わず答えてしまつた。

「文化五年辰年だろう」

なるほど文化五年辰年らしく思われた。

「御前がおれを殺したのは今からちようど百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云う自覚が、忽然として頭の中につつた。おれは人殺であつたんだと始めて気がついた途端に、背中の子が急に石地蔵のように重くなつた。

第
四
夜

広い土間の真中に涼み台のようなものを据えて、その周圍に小さい床几が並べてある。台は黒光りに光っている。片隅には四角な膳を前に置いて爺さんが一人で酒を飲んでゐる。肴は煮しめらしい。

爺さんは酒の加減でなかなか赤くなっている。その上顔中つやつやして皺と云うほどのものはどこにも見当らない。ただ白い髯をありたけ生やしているから年寄と云う事だけはわかる。自分は子供ながら、この爺さんの年はいくつなんでしょうと思つた。ところへ裏の筧から手桶に水を汲んで来た爺さんが、前垂で手を拭きながら、

「御爺さんはいくつかね」と聞いた。爺さんは頬張つた煮びを呑み込んで、

「いくつか忘れたよ」と澄ましていた。爺さんは拭いた手を、細い帯の間に挟んで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんは茶碗のような大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白い髯の間から吹き出した。すると爺さんが、

「御爺さんの家はどこかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、

「臍の奥だよ」と云つた。爺さんは手を細い帯の間に突込んだまま、

「どこへ行くかね」とまた聞いた。すると爺さんが、また茶碗のような大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前のような息をふうと吹いて、

「あつちへ行くよ」と云つた。

「真直かい」と爺さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、障子を通り越して柳の下を抜けて、河原の方へ真直に行つた。

爺さんが表へ出た。自分も後から出た。爺さんの腰に小さい瓢箪がぶら下がっている。肩から四角な箱を腋の下へ釣るしている。浅黄の股引を穿いて、浅黄の袖無しを着ている。足袋だけが黄色い。何だか皮で作つた足袋のように見えた。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四人いた。爺さんは笑いながら腰から浅黄の手拭を出した。それを肝心絢のように細長く絢つた。そうして地面の真中に置いた。それから手拭の周圍に、大きな丸い輪を描いた。しまいに肩にかけた箱の中から真鍮で製らえた飴屋の笛を出した。

「今にその手拭が蛇になるから、見ておろう。見ておろう」と繰返して云つた。子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ていた。

「見ておろう、見ておろう、好いか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる廻り出した。自分は手拭ばかり見ていた。けれども手拭はいっこう動かなかつた。

爺さんは笛をびいびい吹いた。そうして輪の上を何遍も廻つた。草鞋を爪立てるるように、拔足をするように、手拭に遠慮をするように、廻つた。怖そうにも見えた。面白そうにもあつた。やがて爺さんは笛をびたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭の首を、

ちよいと撮^{つま}んで、ぼつと放^{ほう}り込^こんだ。

「こうしておくと、箱の中で蛇になる。今に見せてやる。今に見せてやる」と云いながら、爺さんが真直に歩き出した。柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行つた。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでも追いつて行つた。爺さんは時々「今になる」と云つたり、「蛇になる」と云つたりして歩いて行く。しまいには、

「今になる、蛇になる、

きつとなる、笛が鳴る、」

と唄^{うた}いながら、とうとう河の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思つていると、爺さんはざぶざぶ河の中へ這^{はい}入り出した。始めは膝^{ひざ}くらの深さであつたが、だんだん腰から、胸の方まで水に浸^{ひた}つて見えなくなる。それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、

真直になる」

と唄^{うた}いながら、どこまでも真直に歩いて行つた。そうして髯^{ひげ}も顔も頭も頭巾^{づきん}もまるで見えなくなつてしまつた。

自分は爺さんが向岸^{むかうし}へ上がった時に、蛇を見せるだろうと思つて、蘆^{あし}の鳴る所に立つて、たつた一人いつまでも待つていた。けれども爺さんは、とうとう上がつて来なかつた。

第五夜

こんな夢を見た。

何でもよほど古い事で、神代に近い昔と思われるが、自分が軍をして運悪く敗北のために、生擒になつて、敵の大将の前に引き据えられた。

その頃の人はみんな背が高かった。そうして、みんな長い髯を生やしていた。革の帯を締め、それへ棒のような剣を釣るしていた。弓は藤蔓の太いのをそのまま用いたように見えた。漆も塗つてなければ磨きもかけてない。極めて素樸なものであった。

敵の大将は、弓の真中を右の手で握つて、その弓を草の上へ突いて、酒壺を伏せたようなものの上に腰をかけていた。その顔を見ると、鼻の上で、左右の眉が太く接続つてゐる。その頃髪剃と云うものは無論なかった。

自分は虜だから、腰をかける訳に行かない。草の上に胡坐をかいてゐた。足には大きな藁沓を穿いていた。この時代の藁沓は深いものであった。立つと膝頭まで来た。その端の所は藁を少し編残して、房のように下げて、歩くとばらばら動くようにして、飾りとしていた。

大将は篝火で自分の顔を見て、死ぬか生きるかと聞いた。これはその頃の習慣で、捕虜にほだれでも一応はこう聞いたものである。生きるかと答えると降参した意味で、死ぬと云うと屈服しないと云う事になる。自分は一言死ぬと答えた。大将は草の上に突いていた弓を向うへ抛げ

て、腰に釣るした棒のような剣をするりと抜きかけた。それへ風に靡いた篝火が横から吹きつけた。自分は右の手を楓のように開いて、掌を大将の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云う相図である。大将は太い剣をかちやりと鞘に収めた。

その頃でも恋はあった。自分は死ぬ前に一目思う女に逢いたいと云つた。大将は夜が開けて鶏が鳴くまでなら待つと云つた。鶏が鳴くまでに女をここへ呼ばなければならぬ。鶏が鳴いても女が来なければ、自分は逢わずに殺されてしまう。

大将は腰をかけたまま、篝火を眺めている。自分は大きな藁沓を組み合わせたまま、草の上で女を待つてゐる。夜はだんだん更ける。

時々篝火が崩れる音がする。崩れるたびに狼狽えたように焔が大将になだれかかる。真黒な眉の下で、大将の眼がびかびかと光つてゐる。すると誰やら来て、新しい枝をたくさん火の中へ抛げ込んで行く。しばらくすると、火がばちばちと鳴る。暗闇を弾き返すような勇ましい音であつた。

この時女は、裏の檣の木に繋いである、白い馬を引き出した。鬣を三度撫でて高い背にひらりと飛び乗つた。鞍もない鏡もない裸馬であつた。長く白い足で、太腹を蹴ると、馬はいつさんに駆け出した。誰かが篝りを継ぎ足したので、遠くの空が薄明るく見える。馬はこの明るいものを目懸けて闇の中を飛んで来る。鼻から火の柱のような息を二本出して飛んで来る。それで女は細い足でしきりなしに馬の腹を蹴つてゐる。馬は蹄の音が宙で鳴るほど早く飛んで来る。

女の髪は吹流しのように闇の中に尾を曳いた。それでもまだ籥のある所まで来られない。すると真闇な道の傍で、たちまちこけこつこつという鶏の聲がした。女は身を空様に、両手に握った手綱をうんと控えた。馬は前足の蹄を堅い岩の上に発矢と刻み込んだ。こけこつこつと鶏がまた一声鳴いた。女はあつと云つて、緊めた手綱を一度に緩めた。馬は諸膝を折る。乗った人と共に真向へ前へめつた。岩の下は深い淵であつた。蹄の跡はいまだに岩の上に残っている。鶏の鳴く真似をしたものは天探女である。この蹄の痕の岩に刻みつけられている間、天探女は自分の敵である。

第六夜

運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集まつて、しきりに下馬評をやつていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜めに山門の龕を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗の門が互いに照り合つてみごとに見える。その上松の位地が好い。門の左の端を眼障にならないように、斜に切つて行つて、上になるほど幅を広く屋根まで突出しているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。その中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立っているに相違ない。

「大きなんだなあ」と云っている。

「人間を拵えるよりもよっぽど骨が折れるだろう」とも云つている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。私やまた仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「どうも強そうですね。なんだつてえませ。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつて云いますぜ。何でも日本武尊よりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。この男は尻を端折つて、帽子を被らずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かしている。いっこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子のようなものを乗せて、素袍だか何だかわからない大きな袖を背中で括つている。その様子がいかにも古くさい。わいわい云つてる見物人とはまるで釣り合が取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇体ともほとんど感じ得ない様子で一生懸命に彫っている。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なした。天下の英雄はただ仁王と我れとあるのみと云う態度だ。天晴れだ」と云つて賞め出した。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している」と云つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を豎に返すや否や斜すに、上から槌を打ち下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がつて来た。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟んでおらんように見えた。

「よくああ無造作に鑿を使って、思うような眉や鼻ができるものだな」と自分はいあんまり感心

したから独言ひひとりごとのように言った。するとさっきの若い男が、
 「なに、あれは眉や鼻を鑿ので作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋うまっているのを、
 鑿のと槌つの力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけっして間違
 うはずはない」と云った。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。はたしてそうなら誰にでもできる
 事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫ほつてみたくなつたから見物をやめてさつそく家
 へ帰った。

道具箱から鑿のと金槌かなづちを持ち出して、裏へ出て見ると、せんだつての暴風あらしで倒れた檜かを、薪まきに
 するつもりで、木挽こびきに挽ひかせた手頃な奴やつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢ほいよく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見当らな
 かつた。その次のにも運悪く掘り当てる事ができなかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。
 自分は積んである薪を片かたつ端はしから彫ほつて見たが、どれもこれも仁王を蔵かくしているのはなかつ
 た。ついに明治の木にはとうてい仁王は埋うつていないものだと思つた。それで運慶うんけいが今日まで
 生きている理由もほぼ解とつた。

第七夜

何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしの絶間なく黒い煙を吐いて浪を切つて進んで行く。凄じい音である。けれどもどこへ行くんんだか分らない。ただ波の底から焼火箸のような太陽が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしばらく掛つているかと思うと、いつの間にか大きな船を追い越して、先へ行ってしまふ。そうして、しまいには焼火箸のようにじゅつと行ってまた波の底に沈んで行く。そのたんびに蒼い波が遠くの向うで、蘇枋の色に沸き返る。すると船は凄じい音を立ててその跡を追かけて行く。けれども決して追つかない。

ある時自分は、船の男を捕まえて聞いて見た。

「この船は西へ行くんですか」

船の男は怪訝な顔をして、しばらく自分を見ていたが、やがて、

「なぜ」と問い返した。

「落ちて行く日を追かけるようだから」

船の男はからからと笑つた。そうして向うの方へ行つてしまつた。

「西へ行く日の、果は東か。それは本真か。東出る日の、御里は西か。それも本真か。身は波の上。取枕 流せ流せ」と囁している。船へ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太い帆綱を

手繰つていた。

自分は大変心細くなつた。いつ陸へ上がれる事か分らない。そうしてどこへ行くのだから知れない。ただ黒い煙を吐いて波を切つて行く事だけはたしかである。その波はすこぶる広いものであつた。際限もなく蒼く見える。時には紫にもなつた。ただ船の動く周囲だけはいつでも真白に泡を吹いていた。自分は大変心細かつた。こんな船にいるよりいつそ身を投げて死んでしまおうかと思つた。

乗合はたくさんいた。たいていは異人のようであつた。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇つて船が揺れた時、一人の女が欄に倚りかかつて、しきりに泣いていた。眼を拭く手巾の色が白く見えた。しかし身体には更紗のような洋服を着ていた。この女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気がついた。

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知つてるかと思つた。自分はつまらないから死のうとさえ思つている。天文学などを知る必要がない。黙つていた。するとその異人が金牛宮の頂にある七星の話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作つたものだと言つた。最後に自分に神を信仰するかと思つた。自分は空を見て黙つていた。

或時サローンに這入つたら派手な衣裳を着た若い女が向うむきになつて、洋琴を弾いていた。その傍に背の高い立派な男が立つて、唱歌を唄つている。その口が大変大きく見えた。けれども

二人は二人以外の事にはまるで頓着していない様子であった。船に乗っている事さえ忘れているようであった。

自分はますますつまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりには人のいない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかつたと思つた。けれども、もう遅い。自分は厭でも応でも海の中へ這入らなければならぬ。ただ大変高くできていた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。しかし捕まえるものがないから、しだいしだいに水に近づいて来る。いくら足を縮めても近づいて来る。水の色は黒かつた。

そのうち船は例の通り黒い煙を吐いて、通り過ぎてしまつた。自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やつぱり乗っている方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。

第八夜

床屋の敷居を跨いだら、白い着物を着てかたまっていた三四人が、一度にいらつしやいと云った。

真中に立つて見廻すと、四角な部屋である。窓が二方に開いて、残る二方に鏡が懸っている。鏡の数を勘定したら六つあった。

自分はその一つの前へ来て腰をおろした。すると御尻がぶくりと云った。よほど坐り心地が好くできた椅子である。鏡には自分の顔が立派に映った。顔の後には窓が見えた。それから帳場格子が斜に見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通る往來の人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎はいつの間にかパナマの帽子を買って被っている。女もいつの間にか拵らえたものやら。ちよつと解らない。双方とも得意のようであった。よく女の顔を見ようと思ふうちに通り過ぎてしまった。

豆腐屋が喇叭を吹いて通った。喇叭を口へあてがっているんで、頬べたが蜂に螫されたように膨れていた。膨れたまんまで通り越したものだから、気がかりでたまらない。生涯蜂に螫されているように思う。

芸者が出た。まだ御化粧をしていない。島田の根が緩んで、何だか頭に締りが無い。顔も寝

ぼけている。色沢が気の毒なほど悪い。それで御辞儀をして、どうも何とかですと云ったが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後ろへ来て、鉢と櫛を持って自分の頭を眺め出した。自分は薄い髻を振って、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。白い男は、何にも云わずに、手に持った琥珀色の櫛で軽く自分の頭を叩いた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちやきちやきと鉢を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見るつもりで眼を睜っていたが、鉢の鳴るたんびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉じた。すると白い男が、こう云った。

「旦那は表の金魚売を御覧なすつたか」

自分は見ないと云った。白い男はそれぎりで、しきりと鉢を鳴らしていた。すると突然大きな声で危険と云つたものがある。はつと眼を開けると、白い男の袖の下に自転車の輪が見えた。人力の柁棒が見えた。と思うと、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなった。鉢の音がちやきちやきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻つて、耳の所を刈り始めた。毛が前の方へ飛ばなくなったから、安心して眼を開けた。栗餅や、餅やあ、餅や、と云う声がすぐ、そこでする。小さい柁をわざと白へあてて、拍子を取つて餅を搗いている。栗餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちよつと

様子が見たい。けれども粟餅屋はけっして鏡の中に出て来ない。ただ餅を搗く音だけする。自分はあるだけの視力で鏡の角を覗き込むようにして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐っている。色の浅黒い眉毛の濃い大柄な女で、髪を銀杏返しに結って、黒纏子の半襟のかかった素袷で、立膝のまま、札の勘定をしている。札は十円札らしい。女は長い睫を伏せて薄い唇を結んで一生懸命に、札の数を讀んでいるが、その読み方がいかにも早い。しかも札の数はどこまで行っても尽きる様子がない。膝の上に乗っているのはたかだか百枚ぐらいだが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分は茫然としてこの女の顔と十円札を見つめていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましょう」と云った。ちようどうまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場格子の方をふり返って見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかった。

代を払って表へ出ると、門口の左側に、小判なりの桶が五つばかり並べてあつて、その中に赤い金魚や、斑入の金魚や、痩せた金魚や、肥った金魚がたくさん入れてあつた。そうして金魚売がその後に行った。金魚売は自分の前に並べた金魚を見つめたまま、頬杖を突いて、じっとしている。騒がしい往來の活動にはほとんど心を留めていない。自分はしばらく立つてこの金魚売を眺めていた。けれども自分が眺めている間、金魚売はちつとも動かなかつた。

第九夜

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争が起りそうに見える。焼け出された裸馬が、夜昼となく、屋敷の周囲を暴れ廻ると、それを夜昼となく足軽共が犇きながら追かけているような心持がする。それでいて家のうちは森として静かである。

家には若い母と三つになる子供がいる。父はどこかへ行つた。父がどこかへ行つたのは、月の出ていない夜中であつた。床の上で草鞋を穿いて、黒い頭巾を被つて、勝手口から出て行つた。その時母の持つていた雪洞の灯が暗い闇に細長く射して、生垣の手前にある古い檜を照らした。

父はそれきり帰つて来なかつた。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いていた。子供は何とも云わなかつた。しばらくしてから「あつち」と答えるようになった。母が「いつ御帰り」と聞いてもやはり「あつち」と答えて笑つていた。その時は母も笑つた。そうして「今に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えたのみである。時々「御父様はどこ」と聞かれて「今に」と答える事もあつた。

夜になって、四隣が静まると、母は帯を締め直して、鮫鞘の短刀を帯の間へ差して、子供を細帯で背中へ背負つて、そつと潜りから出て行く。母はいつでも草履を穿いていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の背中で寝てしまう事もあつた。

土堀の続いている屋敷町を西へ下つて、だらだら坂を降り尽くすと、大きな銀杏がある。この銀杏を目標に右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃で、片側は熊笹ばかりの中を鳥居まで来て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立になる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き当ると、古い拝殿の階段の下に出る。鼠色に洗い出された賽銭箱の上に、大きな鈴の紐がぶら下がつて昼間見ると、その鈴の傍に八幡宮と云う額が懸つてある。八の字が、鳩が二羽向いあつたような書体にできているのが面白い。そのほかにもいろいろの額がある。たいていは家中のものの射抜いた金的を、射抜いたものの名前に添えたのが多い。たまには太刀を納めたのもある。

鳥居を潜ると杉の梢でいつでも梟が鳴いている。そうして、冷飯草履の音がびちやびちやする。それが拝殿の前でやむと、母はまず鈴を鳴らしておいて、すぐにしゃがんで柏手を打つ。たいていはこの時梟が急に鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。母の考えでは、夫が侍であるから、弓矢の神の八幡へ、こうやつて是非ない願をかけたなら、よもや聴かれぬ道理はなからうと一箇に思いつめている。

子供はよくこの鈴の音で眼を覚まして、四辺を見ると真暗だものだから、急に背中で泣き出す事がある。その時母は口の内では何か祈りながら、背を振つてあやそうとする。すると皆く泣きやむ事もある。またますます烈しく泣き立てる事もある。いずれにしても母は容易に立たない。一通り夫の身の上を祈つてしまうと、今度は細帯を解いて、背中の子を摺りおろすように、

背中から前へ廻して、両手に抱きながら拜殿を上つて行つて、「好い子だから、少しの間、待つておいでよ」ときつと自分の頬を子供の頬へ擦りつける。そうして細帯を長くして、子供を縛つておいて、その片端を拜殿の欄干に括りつける。それから段々を下りて来て二十間の敷石を往つたり来たり御百度を踏む。

拜殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帯の丈のゆるす限り、広縁の上を這い廻つていく。そう云う時は母にとつて、はなはだ楽な夜である。けれども縛つた子にひいひい泣かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方のない時は、中途で拜殿へ上つて来て、いろいろすかしておいて、また御百度を踏み直す事もある。

こう云う風に、幾晩となく母が氣を揉んで、夜の目も寝ずに心配していた父は、とくの昔に浪士のために殺されていたのである。

こんな悲い話を、夢の中で母から聞いた。

第十夜

庄太郎が女に攫さらわれてから七日目の晩にふらりと帰って来て、急に熱が出てどつと、床に就ついていると云つて健けんさんが知らせて来た。

庄太郎は町内一の好男子こうだんしで、至極しごく善良な正直者である。ただ一つの道楽がある。パナマの帽子を被つて、夕方になると水菓子屋の店先へ腰をかけて、往来の女の顔を眺めている。そうしてしきりに感心している。そのほかにはこれと云うほどの特色もない。

あまり女が通らない時は、往来を見ないで水菓子を見ている。水菓子にはいろいろある。水蜜桃すいみつ桃や、林檎りんごや、枇杷びわや、バナナを綺麗に籠かごに盛つて、すぐ見舞物みまげものに持つて行けるように二列に並べてある。庄太郎はこの籠かごを見ては綺麗だと云つて、商売をするなら水菓子屋に限ると云つてゐる。そのくせ自分はパナマの帽子を被つてぶらぶら遊んでいる。

この色がいいと云つて、夏蜜柑なつみかんなどを品評する事もある。けれども、かつて銭ぜにを出して水菓子を買つた事がない。ただでは無論食たわらない。色ばかり賞ほめてゐる。

ある夕方一人の女が、不意に店先に立つた。身分のある人と見えて立派な服装をしている。その着物の色がひどく庄太郎の気に入つた。その上庄太郎は大変女の顔に感心してしまつた。

そこで大事なパナマの帽子を脱つて丁寧ていねいに挨拶あいさつをしたら、女は籠話かごわの一番大きいのを指して、これを下さいと云うんで、庄太郎はすぐその籠を取つて渡した。すると女はそれをちよつと提さ

げて見て、大変重い事と云つた。

庄太郎は元来閑人ひまじんの上に、すこぶる気作きさくな男だから、ではお宅まで持つて参りましょうと云つて、女といつしよに水菓子屋を出た。それぎり帰つて来なかつた。

いかな庄太郎でも、あんまり呑気どんき過ぎる。只事ただごとじゃ無なかろうと云つて、親類や友達が騒さわぎ出している、七日目の晩になつて、ふらりと帰つて来た。そこで大勢寄つてたかつて、庄さんどこへ行つていたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乗つて山へ行つたんだと答えた。

何でもよほど長い電車に違ちがはない。庄太郎の云うところによると、電車を下りるとすぐと原へ出たそうである。非常に広い原で、どこを見廻しても青い草ばかり生はえていた。女といつしよに草の上を歩いて行くと、急に絶壁たつせきの天辺てんぺんへ出た。その時女が庄太郎に、ここから飛び込んで御覽ごらんなさいと云つた。底を覗のぞいて見ると、切岸きりぎしは見えるが底は見えない。庄太郎はまたパナマの帽子を脱いで再三辞退しじたいした。すると女が、もし思い切つて飛び込まなければ、豚ぶたに舐なめられますが好ようござんすかと聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門うんえもんが大嫌だいけんだつた。けれども命には易やすえられないと思つて、やつぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴らして来た。庄太郎は仕方なしに、持つていた細い檳榔樹びんろうじゆの洋杖やうじやくで、豚の鼻頭びなづを打つた。豚はぐうと云いながら、ころりと引ひつ繰くり返かへつて、絶壁の下へ落ちて行つた。庄太郎はほつと一息接いいでいるとまた一匹の豚が大きな鼻を庄太郎に擦りつけに来た。庄太郎はやむをえずまた洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いてまた真逆まぎやく様に穴の底へ転まげ込んだ。するとまた一匹あらわれた。

この時庄太郎はふと気がついて、向うを見ると、遙の青草原の尽きる辺から幾万匹か数え切れぬ豚が、群をなして一直線に、この絶壁の上に立っている庄太郎を目標けて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心から恐縮した。けれども仕方がないから、近寄ってくる豚の鼻頭を、一つ一つ丁寧に檳榔樹の洋杖で打っていた。不思議な事に洋杖が鼻へ触りさえすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。覗いて見ると底の見えない絶壁を、逆さになった豚が行列して落ちて行く。自分がこのくらい多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながら怖くなった。けれども豚は続々くる。黒雲に足が生えて、青草を踏み分けるような勢いで無尽蔵に鼻を鳴らしてくる。庄太郎は必死の勇をふるって、豚の鼻頭を七日六晩叩いた。けれども、とうとう精根が尽きて、手が薙弱のように弱って、しまいには豚に舐められてしまった。そうして絶壁の上へ倒れた。健さんは、庄太郎の話をごこまでして、だからあんまり女を見るのは善くないよと云った。自分ももつともだと思つた。けれども健さんは庄太郎のバナマの帽子が貰いたいと云っていた。庄太郎は助かるまい。バナマは健さんのものだろう。

夢 十 夜

著 夏目漱石

出典 青空文庫

底本 「夏目漱石全集10巻」ちくま文庫、筑摩書房

一九八八（昭和六十三）年七月二十六日第一刷発行

一九九六（平成八）年七月十五日第五刷発行

底本の親本 「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

一九七一（昭和四十六）年四月〜一九七二（昭和四十七）年一月

入力 野口英司 一九九七年十二月十六日公開

二〇一三年七月十七日修正

組版 スズ 二〇二三年十二月二十一日公開



青空文庫
トップページ